

学位論文審査要旨 公開審査日 2018年9月26日(水)

報告番号：甲・ <input checked="" type="checkbox"/> 第 2147 号		氏名：佐藤宏樹	
論文審査 担当者	主査 教授 齋藤 和博 印	副査 教授 阿部 信二 印	
		副査 教授 土田 明彦 印	
<p>審査論文の題目： Interstitial lung disease associated with cetuximab in patients with head and neck carcinoma: a single-institution experience in Japan (頭頸部扁平上皮癌患者に対するセツキシマブ投与関連薬剤性間質性肺炎の検討)</p> <p>著者： Hiroki Sato, Kiyooki Tsukahara, Isaku Okamoto, Soichiro Takase, Kunihiko Tokashiki, Yuri Ueda, Kazuhiro Hattori, Ayumi Agata, Akira Shimizu</p> <p>掲載誌： International Surgery(in press, 2018)</p>			
<p>論文要旨：</p> <p>セツキシマブは抗ヒト上皮細胞増殖因子受容体 (EGFR) 抗体であり、頭頸部扁平上皮癌に標準的に使用される薬剤の一つである。本剤のまれなで重篤な有害事象として間質性肺炎がある。頭頸部癌患者におけるセツキシマブによる薬剤性間質性肺炎の発症リスク因子は不明である。本研究では同じ分子標的治療薬に分類されているEGFR チロシンキナーゼ阻害薬においてリスク因子として報告されている喫煙者、55歳以上の高齢者、肺疾患の既往、performance status (PS)の低下に関して後方視的に分析した。これまで耳鼻咽喉科・頭頸部外科でセツキシマブを投与した頭頸部扁平上皮癌患者44例を対象として検討を行った。その結果、6例に間質性肺炎を発症した。間質性肺炎を発症した患者はすべて55歳以上で、喫煙歴を有していた。また、3例で肺障害の既往が認められた。以上の結果から、55歳以上の高齢者、喫煙歴、肺疾患の既往が間質性肺炎の危険因子となることが判明した。非喫煙者のHPV陽性、中咽頭癌患者に対するセツキシマブ併用放射線治療は、良い適応になるものと考えられた。</p> <p>審査過程：</p> <ol style="list-style-type: none"> 倫理委員会の承認を得ているかの質問があり、倫理的な問題がないことを確認した。 間質性肺炎の診断方法、画像所見に関する質問があり適切な回答が得られた。 既存の肺疾患の画像的評価方法、機能的評価方法に関する質問があり適切に回答が得られた。 放射線治療の肺への影響に関する質問があり妥当な回答を得た。 化学療法のレジメの適応に関する質問があり適切に回答を得た。 <p>価値判定：</p> <p>本研究は、頭頸部扁平上皮癌の標準的治療に用いられているセツキシマブの有害事象の一つである、間質性肺炎のリスクファクターを明らかにしたものである。今後の頭頸部扁平上皮癌の化学療法を行う際の一つの指標となりうるものであり、学位としての価値を認める。</p>			